

## 2023 年度奨学生総評

○林 桂○

年間佳作入選10編以上で応募資格を得られた学生が、その中から10編の自選作で応募できる規定で、今回の応募作は34編34人であった。高校生の応募はなかった。34編を読みながら、応募資格があり、かつ印象に残った作品を書いているながら、応募がなかった人がいることに思い至り、残念に思った。一年の投稿の成果としての応募でもあるので、せめて選考の舞台には立って欲しいと思う。高校生にも、才能を感じさせる人が何人かいたので、これも残念であった。

事務局の指定は、順位指定のない15編の推薦。作者名が伏せられた作品での選考である。10編全体の作家として世界性を考慮しながらも、15編に絞るために、改めて1編1編をチェックし、その佳作の多寡で確認した。この作業をする中で、印象深い作品の作者名は自ずから知れたので、最後に私が佳作に推薦した作品の取りこぼしはないかをチェックして、15編を選び推薦を行った。

以下、奨学生となった14人の1作品を引いて、祝意としたい。(順不同)

● さいう（渡邊美愛）●

引き止めることば  
を  
むりに飲み込んで  
つつじが胸にざらついている

● 松下誠一 ●

ファミレスの  
バックヤードに感情が  
あけたと分かる穴ひとつある

● 長谷川柊香（奥村俊也）●

指先に  
部品の金属臭

遠雷

● 源楓香（清水将也）●

誰しものが街の一部でありながら  
誰を欠いても成立する街

● 汐見りら（塩田きよら）●

あの子まだ十六だった  
斎場の鮪は冗談みたいに赤い

● 玻璃（藤野日向子） ●

水にさえ致死量があり枯れ野原

● 白野（白野実悠） ●

水泳の授業のあとの国語では  
クラスのひとが少しあたらしい

● あお（小笠原風花） ●

寂しさが目配せしてくる教室で  
便覧ばかり読んで過ごした

● Flim（杉原健吾） ●

僕は人より小舟寄りな気がしてて  
帆を揚げるようセーターを干す

● マズルカ（渡邊早紀） ●

難しい方の「お」です、  
そう「を」です。  
しゃがんで蟻を見てるみたいな

● 篠遠早紀 ●

花杏寮退く君とグータッチ

● 中矢温 ●

かき氷徒歩圏内がぜんぶ晴れ

● 郡司和斗 ●

深刻になればなるほど学校は  
指紋ばかりの雨の日だった

● 真島しましま（高田皓輔） ●

銃撃戦が繰り広げられ  
味噌汁があったまる

以下、惜しくも奨学生とはならなかったが、特に印象に残った作者の1編とコメント。

● もぐもぐ ●

緩やかな腹痛  
鳩時計は白い

【評】俳句体と短歌体の両方を書く。柔らかな感性が魅力。18歳。期待したい。

● 桜咲 ●

自己紹介を  
なるべく普通にしようと  
努力をする

【評】短詩体をベースに、俳句体も書く文体の広がりがある。ユーモアとペーソスがあって、決して難しい措辞には向かわないのがいい。作者像がしっかり結ぶ貴重な書き手。

● 青野陽 ●

寂しい日に食べようとして  
買った飴  
本当に寂しい日か 今日は

【評】10編のトーンが美しい。その意味で、1編1編を読んでいたときには気づけなかった力量のある作家性を感じた。「寂しさ」が読者の心に沁み入るような言葉だ。

● 永山逢海 ●

ゆっもらも ゆもっも  
と花震わせる  
あおむしの幽霊のうたたね

【評】1編1編が多彩で楽しい。独特の世界を創造する。言葉遊びにも才能が光る。他者にはない存在感がある作品群だ。

● 小井詩文 ●

ぼくらは部分的真実を生きている

【評】アフォリズムと短詩の中間のような作品は、ときに世界をユーモラスに切り取る。この作者の作風も他にない貴重なものだ。